

## iPhone で「ひと<sup>い</sup>はく好いとこ撮り」

竹久マサオ / yumework. cc

●今回出品した写真は「ひとはく」の内外をすべて iPhone で撮って内蔵のアプリで補正し、そのまま Wi-Fi でプリンターに送って出力した。

●ここ数年、私はプライベートな写真はすべて iPhone で撮っている。昨春まで契約先でPCに連動した専用機材で撮っていたので、現在自分の手元には iPhone と古い初心者向け一眼レフしか持ち合わせていない。ところがそれであまり不自由しないのがなんとも愉快的な時代と感じている。

長い間、カメラと交換レンズ、ストロボなどを入れた重いカメラバッグと三脚をかついで取材していたことを考えると、歳をとった現在、iPhone があって本当に幸せに思う。

そして大変興味ある被写体としての「ひとはく」に出会い、好いとこ撮りした写真を並べてみた。



●三田に引っ越して来て間もなく近所に大きな博物館があると知り、しかもそれが丹下健三の建物だと知って急いで訪れたのが去年の6月下旬。

2階の吹き抜けから見える天井の格子から通路のカーブまで、まさに「世界のタンゲ」ワールド。同様に深田公園の緑と青空がきれいに写り込むハーフミラーの壁面にも引き込まれてしまう。

●丹下健三は日本の戦後の現代建築を最初に世界に広めた代表的な建築家であり、多くの建築を残しただけでなく優秀な後継者を育てた功労者だ。ところがこの「ひとはく」が彼の設計であることは今あまり知られていない。館内の豊富な収蔵品と共に、地元のレガシーとしてもっと大声で宣伝しても良いのではないかと思う。建築家にあこがれて丹下作品を追いかけた一人として、私自身も何か出来ないものかと目下思案中。地域おこしとして、楽しいコラボなどが出来ればこの上なく嬉しい。

●丹波竜のことは「ひとはく」に来て初めて知り、丹下の建物にはとても似つかわしいと思った。というのは、かつて70年大阪万博の中央広場には丹下が設計した大屋根の建築があって、その真ん中を突き抜けて岡本太郎の「太陽の塔が」空に顔を出していた。その大屋根は後年解体されてしまい、今は塔だけが残されているが、この70年の万博以来、丹下建築にはデカイ怪物？が良く似合うと私は密かに確信しているのだ。そしてまさに丹下が他界した翌年の2006年、丹波竜が隣町で長い眠りからさめて「ひとはく」に導かれるように来たことには、70年代の再来なのではとさえ思ってしまう。



●1億1千万年前のピースサインまたはパンザーイ！  
※実際は丹波竜の「血道弓」という骨の化石

●ところでここでの丹下の仕事は初めにニュータウンのシンボルとして深田の谷の上に大きな歩道橋を架けたところ、後に橋の下の谷を埋めるようにして博覧会のメインパビリオンに改築、やがてそれが今の「ひとはく」になったという。ひょっとしてこの谷はかつては丹波竜のねぐらであって、ただ我が家に戻って来ただけではないのか？と想像は膨らむ。

丹下と丹波、だから私は「ひとはく」を「タンタンの館」と勝手に名づけることにした。



●そんな「タンタンの館」のたくさんの標本や展示品たちはまるで子供の頃のオモチャ箱にあふれる宝物のようだ。それぞれが物語をたくさん私に話しかけてくれるので、妄想？と創造はつきない。新しい収蔵庫も出来て、今後ますます増えて行くだらう新しい仲間たちの次なる物語も聞き漏らさないように、また iPhone を持って「ひとはく」通いを続けようと思う。

●今回の「共生のひろば」に参加していた高校生の皆さんが、自分たちで見つけた植物の DNA の塩基配列を専門業者に分析依頼して研究を進めたり、物質の発色をナノレベルで解析していることに、隔世の感と同時に嬉しさと未来への希望が膨らんだ。

しかしいっぽう最近の社会情勢を見渡すと決して楽観できる状況ではなく、世界中の知恵と勇気を集めて平和と安心を再構築していかななくてはならない時代に突入している。これからも「ひとはく」が地域を代表する発信基地であり、次世代のインキュベーターとして市民との共生を発展させて行かれることを心から願っている。

●最後に、今回の展示にあたって大変お世話頂いたスタッフの皆様はじめ、いろいろ話を聞かせてもらえた来場者や参加者の皆様にも感謝申し上げます。



今回展示した写真は、私のサイトの以下の特設ページに掲載しているので、ご覧いただき感想などいただければ有難い限り。

<https://www.yumework.cc/hitohaku2023>

mail: yumework@gmail.com

